

法で私達の生活基盤を支えている鉱物資源が採掘され、有効利用されるための基礎資料として活用されることを期待したい。

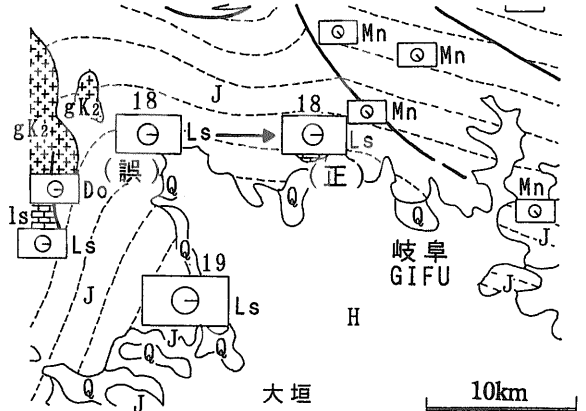
また、不十分な点や誤りについては、今後さらに検討をすすめて、よりよいものとして情報ネットなどを通じて提供していきたい。

本鉱物資源図をとりまとめるにあたっては、所内外の多くの方にご協力いただいた。ご協力下さった皆様に心より謝意を表します。

SUDO Sadahisa and KOMURA Ryoji (2001) : 1:500,000 Mineral Resources Map series no.4 "Chubu-Kinki".

<受付：2000年9月11日>

【訂正とお詫び】50万分の1鉱物資源図「中部近畿」の中で、主な鉱床の表のNo.18・住友岐阜鉱山の位置が本来の位置よりも西側にずれています。下図のとおり訂正し、心よりお詫び申し上げます。



話題

「日本六古窯」

日本の陶磁器の源流を成す奈良・平安時代の「須恵器」は、中国から伝来した物そのものであり、その後、鎌倉～桃山時代になり、日本的な焼き物(国焼)が備前、丹波、信楽、常滑、瀬戸、越前で作られるようになって、その伝統が今日まで引き継がれているとの説から、戦後この6ヶ所が「日本六古窯」と呼ばれるようになった。

鎌倉～桃山時代に焼かれた六古窯の焼き物は、それぞれ古備前、古丹波、古信楽、古常滑、古瀬戸、古越前と呼ばれている。

この六古窯説は戦後、越前で古窯跡群が発見された頃に提唱されたもので、その後各地から続々と古窯跡が発見され、六古窯説は通用しなくなった。しかし、「日本六古窯」は今なお一般的に使われている。

(須藤定久)

「日本六古窯」

